生き生きとした学級づくりを目指して

― 人間関係づくりの手法を用いたアプローチ ―

南国市立長岡小学校　　教諭　　横田　嘉代

人間関係づくりの一つとして、プロジェクトアドベンチャー（以下ＰＡ）等の理論を学び、学校に活かせるよう研究を進めた。在籍校のある学年を中心に、Ｑ－Ｕを用いて学級の実態を担任と共に検討し、課題を探った。課題解決のために計画的にＰＡの活動を行い定期的に授業後のアンケートやＱ－Ｕを実施し、その効果を検証することで、人間関係づくりの手法が、生き生きとした学級づくりに役立つのではないかと考えた。

キーワード：プロジェクトアドベンチャー、Ｑ－Ｕアンケート、アクティビティ、ふり返り

１　はじめに

核家族化が進んだ家庭では、子どもたちは集団での生活体験が少なくなっており、地域社会でも住民の間で行われる数々の行事を通した集団体験が非常に少なくなっている。このような集団体験の未熟さは、子どもたちのコミュニケーション能力やソーシャル・スキル能力を著しく低下させてきたと思われる。

自由主義教育の実践者Ａ・Ｓ・ニイルは『問題の子ども』の中で、「集団体験が個を育てる」と言っている。集団体験には＜人間関係の作り方・維持の仕方を学習する＞＜他人とのかかわりを通して、自分という意識を定める＞＜ソーシャル・スキルを身につけることができる＞＜自我・超自我を身につけることができる＞の以上４つの効果があると説明している。教師は、この集団体験の効果を活用し、子どもたちを育て、学級集団を育成することが大きな役割であるといえる。

そこで、変化している子どもたちの実態をとらえ、子どもたち一人一人との人間関係を築き上げ、子どもたちが自分らしい生き方を育むことができるような教育力のある学習集団を作っていくことがますます必要になってくるのではないだろうか。

そのために、学級担任は様々な課題に的確に対応できる技術やカウンセリングマインドを持つことが今求められているのではないかと考える。日々、学級担任は居心地の良い、お互いを認め合える学級を目指して学級担任は日々努力している。しかし、様々な子どもの実態を目の前にして、悩みを抱え一人で奮闘している担任も少なくない。その中に、学級崩壊やいじめ・不登校・問題行動などがある。

ＰＡＪ難波克己は、人とかかわり合う段階は大きく４つに分かれると述べている。お互いが知り合うことのできる出会いの場面、何か一つのことを互いに協力・協働し達成する喜びを味わえる場面、共有し共感し合えたりすることによって信頼関係が生まれる場面、課題解決や目標達成に向かってチャレンジしていくことができる場面である。反対に、お互いを知り合うことができなければ、警戒心が生まれ、不信感を持ち、ついには無気力無関心になってしまうと説いている。

現在人間関係をつなぐ方法として、様々な手法が研究されている。経験や体験を中心とした手法や心理学の面から、グループカウンセリングとしての手法もある。どの手法も、教育現場で役立つものとして紹介され、実践されている。

そこで、人間関係づくりの手法を学級の中に取り入れることによって、子ども同士のつながりやかかわりが増していくのではないかと考え、この研究に取り組むことにした。

２　研究目的

(1)「学級満足度尺度」いごこちのよいクラスをつくるためのアンケートＱ－Ｕを活用し、学級の実態

を把握する。

(2) 個々の学級実態に適合した人間関係づくりの手法を取り入れることにより、学級集団の意欲や満足度が高まることを検証する。

3 研究方法

(1) 調査研究

① 「学級満足度尺度」(いごこちのよいクラスをつくるためのアンケート：Q－U)

対　　象　　南国市立長岡小学校　　5学年　2クラス

実　　施　　5月・9月　検証授業（前後）　　計4回

② 把握の仕方

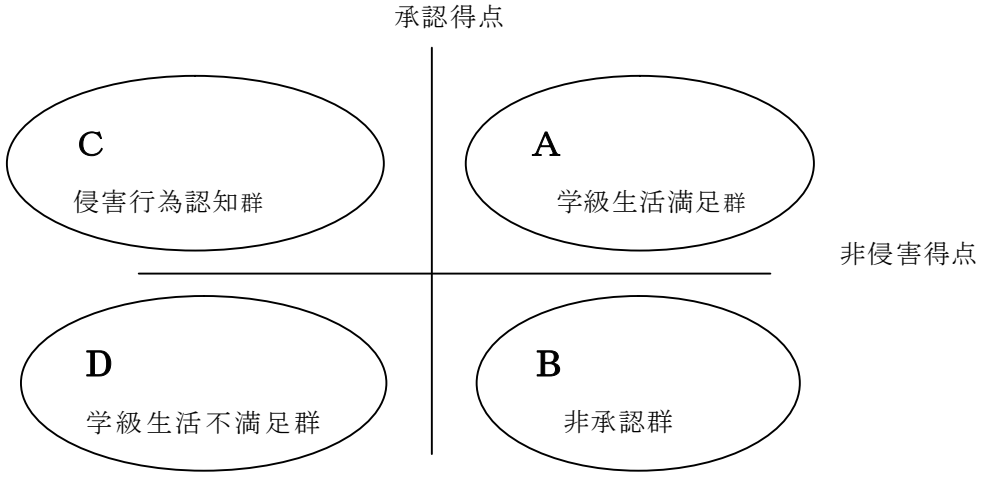
③ ア　学校生活意欲尺度

友だち関係に関してどう感じているか

学習意欲はあるかどうか

学級の雰囲気をどう感じているか

イ　学級満足度尺度



このアンケートを活用することによって、学級全体の雰囲気の把握、個別に対応する必要のある児童の発見、また学級の持つ課題を探っていきたいと考えた。

(2) 理論研究

グループワークを中心とした人間関係づくりの研究として以下の3つの手法の理論を研究した。

① プロジェクトアドベンチャー

② 構成的グループエンカウンター

③ グループワークトレーニング

(3) 実践研究

① ファシリテータートレーニング（指導者講習会）山梨県日野春ＰＡＪロープコース

9月18日から20日（2泊3日）

支援的指導者として土台となる体験と理論を学習する研修。プログラムの構成・比喩・運営・実践をし、お互いにふり返りを行い、学び合う研修会である。

② 検証授業の実施

ア　クラスの実態把握

イ　授業計画

・ ＰＡの手法の活用

・ 実態に応じた活動の選択

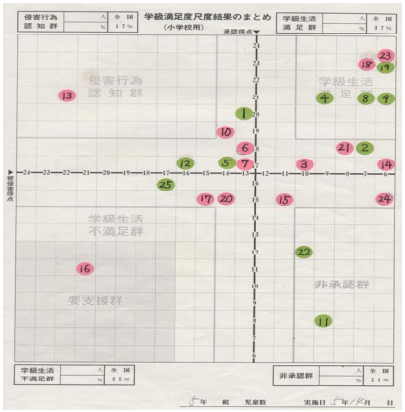
4　研究内容

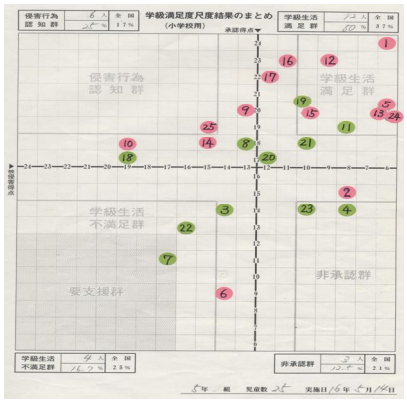
(1)　学級の実態について

本校では、隔年で学級編成を行っている。新学期を迎え、少しずつ慣れてきてはいるが、まだまだ心の距離をお互いに取り合っている状態である。家庭的にもしんどさを抱えている児童が多く、学習面においても生活面においても２極化の傾向にある。特に、ＡＤＨＤ、ＬＤ傾向の児童も見られる。

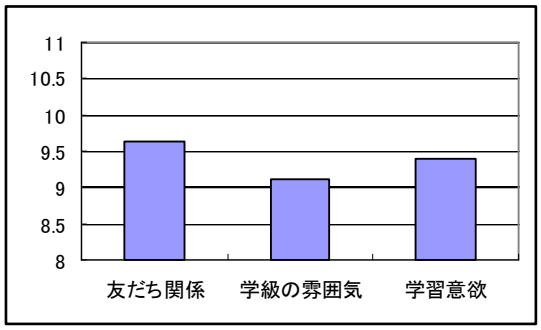
①　５月Ｑ－Ｕアンケートより

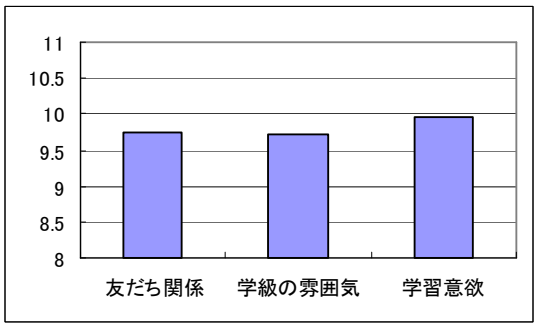
学級満足度尺度





学級生活意欲尺度（平均）





②　分析

ア　全体的になだめの形であるが、ばらつきがある。

イ　個別に対応しなければいけない児童がいる。

ウ　学級生活意欲度尺度での学級の雰囲気を良いと答える子どもたちが少なく、学習においては頑張ろうと思っている傾向が見える。

③　課題と取組

学級担任とアンケートをもとに話し合いを行った。そこから、日常的な生活もからめて学年・学級全体の課題としていくつか上げた。

課題

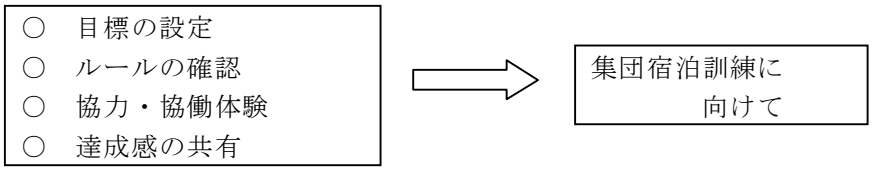
ア　自己表現することが苦手な子どもが多い。

イ　人とのかかわり方がわからない子どもがいる。（相手を傷つけていることに気がつかない）

ウ　感情のコントロールが難しい子どもがいる。

エ　自己肯定感が低い子どもが多い。

取組



(3)　プロジェクトアドベンチャーの導入

解決に向けて、プロジェクトアドベンチャーの手法を中心に取り組むこととした。

①　互いを尊重し合うことを大切にする（フルバリューコントラクト）
②　子どもたちが喜ぶ活動である。(身体を使った)
③　気づき・発見を大切にして、次への活動へ生かそうとする。(アドベンチャーウェーブ)
④　協力・協働作業から課題学習へ発展的な学びができる。(体験学習サイクル)
⑤　個人のめあてや集団の目標設定を大切にする。(ゴールセッティング)
⑥　自分の能力に応じて、場を選択できる（チャレンジバイチョイス）

など、在籍校の実態と自分自身のスキルをかね合わせることができると考えたからである。

(4)　１学期の実践

・ 心をほぐすことを中心に行う
・ 簡単なものから段階的に行う。(身体を動かすことから、思考する方向へ)
・ １対１の関係から、少しずつ人数を増やしていく。

月	目　　標	内　　容	教科
4	個人の目標設定	３枚の紙に、今年の自分の目標を設定する。	学級会活動
5	Ｑ－Ｕアンケート 学級の目標の確認 雰囲気作り	課題発見 みんな鬼・スピードラビット・魔女と妖精 だるまさんがころんだ	学級会活動 学級会活動 総合的な学習
6	集団宿泊訓練に向けて 共通のルールの確認	集団宿泊訓練に対してのブレーンストーミング 子どもたちから出た意見を全体で同意する。 理由付け・友だちのために	総合的な学習 学級会活動
	集団宿泊訓練に向かって	二人組みから少人数へ（ビート） 集団宿泊訓練での自分の目標を出す。(ビーイング) ３人組で力を出し合う。(目・口・足)	学級会活動
	集団宿泊訓練	ビーイングの確認（いつも目標を意識する） 二人から全体で（ハンズアップ） 全員で課題解決（蛇の巣） 振りかえり（何が聞こえ、何を感じたか）	特別活動

○　ふり返りより

・学級担任より

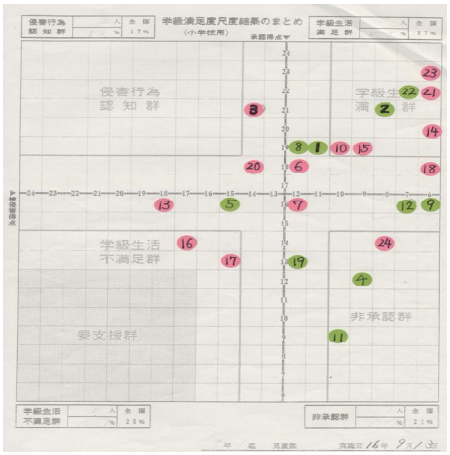
回を重ねることに、クラスで作った目標を意識する場面が見られた。
みんなで活動することに、意欲的になってきた。
集団から離れがちな子どもが、いつのまにか集団に入っている姿が見られた。

(5)　２学期の実践より

①　課題

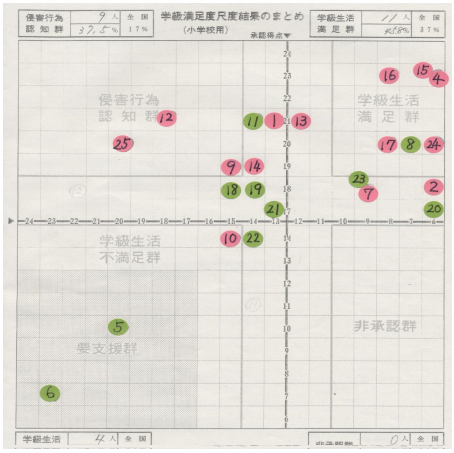
９月のアンケートから次のような実態が現れてきた。

表１　Ａ組



非承認群が多い

表２　Ｂ組



侵害行為認知群が多い

②　取組

同じ内容をしていても効果が上がらないと考え、それぞれの担任とも相談をして、クラスごとに内容を変えて検証授業を行うこととした。

Ａ　　非承認群グループの多いクラス

課　題	
全体的に大人しくルールは守ることができるが、お互いに意識し合い、自分の言葉で表現することが苦手になりつつある。	⇒ 対話を重視。コミュニケーションできる雰囲気作り

Ｂ　　侵害行為認知群の多いクラス

課　題	
明るく元気であるが、自己主張が強すぎる傾向がある。感情のコントロールが苦手な児童が多く、ぶつかり合う。	⇒ お互いの意見を尊重することを重視。ルールを守ることの大切さを体感させる。

③　授業実践

	目的	題材名	内容
A	雰囲気づくり グループワークトレーニング	・リスと森と木 ・わくわくサッカーゲーム2002 ・ＺＯＯＭ	・いつでも、だれとでも。 ・いつのまにか、誰かがリーダーとなり伝える。自分のカードをどのように伝えるか、友達のカードをどのように聴くか？
B	雰囲気づくり 体を使って	・ペットボトルで地球を救え ・平均台シャッフル ・納豆リバーを渡れ	・一人の意見よりも、みんなの意見を合わせたほうが、視野を広く持てる。 ・平均台の上で、落ちないように順番を代える。 ・全員がつながって落ちないように渡っていく。

実践例①

単元名　　学級活動Ⅱ　わくわくサッカーゲーム（グループワークトレーニング）

目標

○　自分の情報を「伝える」、相手の情報を「聞く」ことができる。
○　友だちと考えながらメンバー表を作成することができる。
○　楽しく活動できる。

写真１

写真２

実践例②

単元名　　学級活動Ⅱ　「納豆リバー」を渡ろう

目標

○　「納豆リバー」を全員で達成できるようにするために活動することができる。
○　自分の役割を考えたり、実行するための方法を考えたりすることができる。
○　人の意見を大切に聞くことや、声をかけることができる。

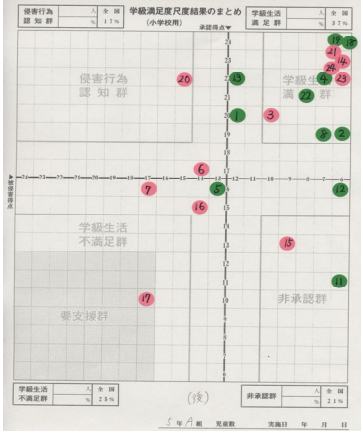
写真３

写真４

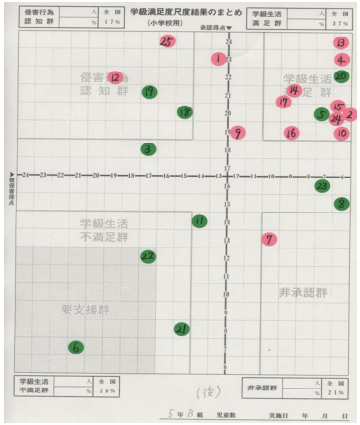
(6)　成果と課題

①　結果

検証授業後のアンケートより



非承認群の多いクラス(授業後)



侵害行為認知群の多いクラス（授業後）

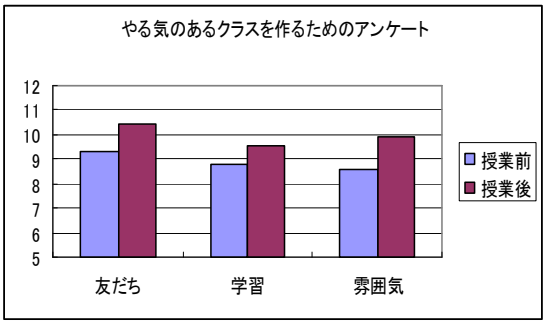


表３

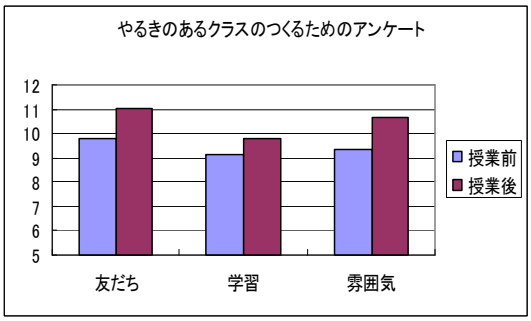


表４

③　分析

○　非承認群の多いクラス

非承認群	９月	28%	検証授業後	12%
学級生活満足群		44%		52%

○　侵害行為認知群の多いクラス

侵害行為認知群	９月	40%	検証授業後	24%
学級生活満足群		44%		48%

④　考察

○　学級生活満足度尺度アンケートの結果では、９月当初と比べて非承認群・侵害行為認知群に入っている子どもが少なくなってきた。人間関係をつくる方法としてのプロジェクトアドベンチャーの手法を導入したことは、良い結果となったと考える。特に、満足群の上位に位置する子どもが増えている。

○　やる気のあるクラスを作るためのアンケートでは、二つのクラスとも、検証授業前と検証授業後ではどの項目も上昇している。友だち関係がよくなれば、学級の雰囲気も良くなり、学習意欲も増す、ということがいえるのではないかと考える。

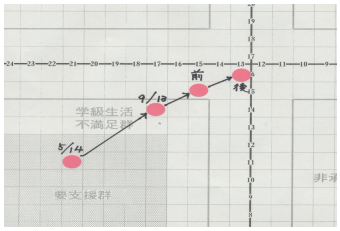
⑤　成果と課題

○　子どもたちの様子を客観的に観るため、「いごこちのよいクラスを作るためのアンケート：Ｑ－Ｕ」を活用したことは大変効果的であったと考える。

○　気になるＡ子について

要支援群に位置している。自分に自信がなく、自己肯定感が低い。友達にどうかかわっていいのかわからなく、休み時間は特別支援教室で過ごす場面が見られた。そこで、教育相談部の先生にもかかわっていただき、学校カウンセラーとともに個別に対応してもらうようにした。それによって、アンケートの結果は回を追うごとに、学級不満足群の位置から満足群のほうへ、上昇しているのが目に見えてわかった。Ｑ－Ｕアンケートは、今支援を必要としている子どもの発見としても、効果的であると言える。

　また、発見によって、学級担任だけでなく、教育相談部の先生方にもかかわっていただき、子どものことについて学校全体で共通の意識を持って接することができたことが良かった。そこで、今後も担任のみではなく、学校全体でかかわることは大切である。



Ａ子の変容

○　二つのクラスとも、授業前と授業後ではどの項目とも平均点が上昇している。

特に、学級の雰囲気、そして友だち関係が大きくアップしている。これは、友だちとの関わ

り方がよくなれば、学級の雰囲気も良くなったと感じている表れである。また、学級の雰囲気や友だち関係と同時に、学習意欲も向上している。学級での友だち関係や、居心地の良い雰囲気では、学習にも意欲が増していくということが言える。

○　クラスの課題に応じて、活動を選んだ。活動することによって、考え始めるクラス、反対に教室でじっくりと考えることによって効果の現れるクラス。子どもたちによって、私たちの提案の仕方・支援の仕方は変化させなければならないと考えられる。そのためには、教師自身もいろいろな手法を学び、日々の授業に生かすことが求められる。

4　まとめ

「ここにいて安心できる」「このクラスなら頑張れそう」という雰囲気をどのように作ればよいか。1年間学ばせてもらった。基本は授業づくりである。その中に、今回のような手法を生かして授業を作っていくことが大切であると考える。学期に1・２回授業を行ったからといって、人間関係はできるものではない。日ごろの意識の中に、子どもたちが気づいたことなどを教師自身も盛り込みながら、日常化へ結び付けることが大切である。「失敗しても大丈夫、支えてくれる仲間がいる」時、遊びの場でも、学習の場でも子どもたちは生き生きと活動できる。学校・学級が楽しい空間になると考える。

そのためには、学校生活のほとんどを占める学級という場を、子ども同士の人間関係づくりの場として捉え、日々の実践の中に人間関係づくりの手法を活用していくことが求められる。

＜参考・引用文献＞

・Ａ・Ｓ・ニイル・堀真一郎訳「問題の子ども」　黎明書房　(1975)
・ウイリアム・Ｊ・クレイドラー／リサ・ファーロン著
プロジェクトアドベンチャージャパン訳
「対立が力に」グループづくりに生かせる体験学習のすすめＣ・Ｓ・Ｌ学習評価研究所　(2001)
・ディック・プラウディ、ジム・ショーエル、ポール・ラドクリフ著
プロジェクトアドベンチャージャパン訳
「アドベンチャーグループカウンセリングの実践」Ｃ．Ｓ．Ｌ学習評価研究所　(1997)
・國分康孝・河村茂雄共著「学級の育て方・生かし方」　金子書房　(1996)
・河村茂雄　編著「グループ体験による学級育成」　図書文化社　(2001)
・河村茂雄・藤村一夫編著「授業スキル」(小学校編)　図書文化社　(2004)
・河村茂雄　著「教師のためのソーシャルスキル」　誠信書房　(2002)
・Istvan Banyai 著　「Ｚｏｏｍ」　Puffin Books　(1995)
・坂野公信・横浜市学校ＧＷＴ研究会著「学校グループ・トレーニング」遊戯社　(1989)